

北都銀行 女子バドミントンクラブ

Hokuto Bank
Badminton Club

2018年の日本A代表に5人もの選手を送り込んだ北都銀行女子バドミントンクラブ。そうそうたる一流選手が揃うクラブを率いて16年から指揮を執る佐々木監督の意外な指導法とは。

撮影●小笠原良 文●竹内松裕

青森&秋田
トップアスリートの
現在地

秋田から世界へ羽ばたく 女子バドミントンの強豪

国内外を飛び回る超多忙な選手たち。
メンバー9人が秋田に揃うことは希だという

北都銀行バドミントンクラブがここ数年、秋田のスポーツ界にポジティブなニュースをもたらしている。創部は1971年。2004年にS/Jリーグで2部から1部に昇格。2006年から7年連続で5位に留まるも、国体では2007年から3年連続準優勝を果たす。同リーグでは2015年に4位、2016年に3位となり、2017年には過去最高の2位を記録した。3マッチ制（ダブルス2試合、シングルス1試合）で競う同リーグではチームの総合力が問われるだけに、着実にステップアップを遂げていることがわかる。

同リーグにとどまらず、2017年は全日本実業団選手権で2位、えひめ国体で優勝するなど飛躍。中でも米元小春と田中志穂が組む通称「ヨネタナ」ペアの活躍は特筆に値する。

2016年の全日本総合選手権のダブルスで準優勝して翌年の日本A代表に入ると、世界最高峰のスーパーシリーズ（SS）を転戦。同年12月にドバイで開かれたSSファイナルで初優勝を成し遂げ、県民栄誉賞が贈られた。

田中は同部女子のキャプテンを2年連続で務める。国内外の遠征で1年のうち約250日以上も遠征や合宿で秋田を離れる現状に「チームに全然いないので、その分結果を出してみんなの励みになればと思っています」と話す。

2017年は「勝てるときとそうでないときの差がある1年だった」とし、それでも徐々に調子を上げたポイントとして、過密スケジュールに対応したことを挙げる。「A代表では試合直前に必ず合宿があり、みっちりトレーニングします。B代表とは違うスケジュールが最初はきつかったんですけど、後半にはついていけるようになりました」

周囲は東京オリンピック出場も期待する。しかし日本の女子ダブルスはレベルが高く、先を見るより結果を積み重ねる姿勢だ。「オリンピックを見据えるというより、少しでも世界ランクを上げたい。いま（6月5日の取材時）世界ランク4位でいるのは、去年の結果によるものなので、今年もすこく結果を大事にしています。去年はSSで1回優勝して、SSプレミアでも優勝した。今年はそれ以上の結果を出したい」

「ヨネタナ」に続く選手も現れている。2018年の日本A代表には「ヨネタナ」に加え永原和可那と松本麻佑のペアと、シングルの川上紗恵奈の5人を送り込んだ。これは、同部の佐々木監督の指導の成果でもある。

佐々木監督は現役時代に、ロンドンとリオデジャネイロの両オリンピックに出場するなど国内外で活躍。引退後の2016年11月に同部コーチに、翌年7月に監督に就任した。「私に求められているのは世界で戦えるチームと選手の育成。見てきたものを具体的にチームに浸透していけるように頑張りたい」と意気込む。

練習では選手に自主性を求めた。佐々木監督の就任までは、監督が決めたメニューをこなしていたが、それでは責任の所在が曖昧になる。「そうではなく、選手自身で自分に何が必要で、それに対して何をすべきか取捨選択して、自分の責任で日々を積み上げる。そうすると試合の勝ち負けにも自分の責任を持てるようになる」という。

佐々木監督はこれまで技術指導はあまりせず、就任から1年かけてチームの土台づくりで没頭してきた。「いまでは選手たちが考え納得した環境で練習している。この形は私が求めていたこと。ここからブレずに取り組んでいけば、さらにチーム力を伸ばしていけると思っています」